

台湾に着任したのは十九年十一月三日である。

秋に最良の徳仁子の父の病に亡くなり心の傷も
もあり 軍人として最高の希望であった比島を我に
は是かあ手あつた。自土南境の徳仁子な分、一身
の後顧なく働けると思ふと 日も早く着任と去り
しまにもたつたわけである。

飛行場着は夜遅くたつたをまぐい銀傳業部
の宿舎に案内エヤ 暗い電灯の下に一人おると
夜をあひした。

明くはは二十年元旦である 茅ヶ崎り伊田と云の上は
司令室がある 台湾方面軍に着任の甲より西せ物は
下らぬ。

(1) 伊田も方面軍より「さす」月「あつた」山海の

珍味を卓上に並べ、軍官民は風儀をいし、
一は井を笑し、飲む程に酔ふ程に、第一我々の
軍とは思えぬ有様である。

皆と決して、我々よに急ぎ着任しに、お持ちの
まことに相立なぬ情、早きであった。

一は井は内地、比島に于く、台湾にのみありと
東洋の知己に書き送つた事と云ゆる事、
出来た。

x x

在り、第八師の師団に於ける、私の任務は情報
通信の事である。

東洋とある時、大本營に挨拶にのり、
担任者、
作、我、主任、
の、新、

(2)

あつた。師団長は、任務は、
立前、別に不備もなく、
唯、我、主任、
に、加、した、
甚、
山、本、師、団、長、は、酒、と、
に、自、筋、車、事、故、
ある。

山本師団長は、
に、自、筋、車、事、故、
ある。

山本師団長は、
に、自、筋、車、事、故、
ある。

山本師団長は、
に、自、筋、車、事、故、
ある。

上、何れも下之にあらざるは其の数は一
層つとぬともなまりも多しと云ふは
「ありた様」
内地の空襲は激しく比島の戦いは感
と極めざる。

單なる情報通信主任の失謀であつたは
なり。 津指揮下歩兵部隊を更に
ある攻撃をいりさせる態勢に整え
は相済まぬ。 内部の事情に多少の
覚えつ、七 胸腔一杯に空を吸ひ
覚悟を物にした次第ありた。
通信組織は訓練に不十分であつた
群通信ヤツ型通信を際し思ひ切つた

「型」に覚え 原始的と笑はれども極はぬと
ためて改革せしむ
情報流通の方法をなすものは結核部
にぬると速達出来ぬが勤務の方法
改め

人を假し機械を假しにすは
変うまい 要は勤務の方法を改め
ゆめの様にする ことと云ふに

研究と稱して 北投温泉に教習して
思ひし上める 様具申した
西は我々精神を述べた事と思つた

一月 日 台北地場から學を愛活し

情報は洋、紅連路のありス

「第四船」の甲司令部の「甲復」のあり者一

と連中、到り着ておきたりしと、
大分怪しと

思ふ間もたゞく、伊田司令部に白旗車に到り着

伊田司令部の教令後、幕僚室に伊田

幕僚と幕僚曰く、「今般、第十方面軍に

取戻せられ、唯今、到着云々の、接収であつた。

ソレと、幕僚と出で、方面軍初等、を謀に電話した

第四般の車、第十方面軍に取戻す、は、復年、に

水、あり、全く、信ぜられぬとの事、
是れ、角も、事懸、に

認めし、宿、永軍司令部、を、方面軍に送つて

体、よ、に、取、扱、ひ、と、六、子、事、に、収、ま、り、た

第四般の車司令部の南部の退却は

事實であつた、問も干し、伊田命令で、「事懸処理」

と六子事、に、屏東に出張する事になつた、伊田

光澤長は口頭で、「接収するが、予」と言ふ

どう事懸を処理したらよいか、見てもつかない

何十方面軍も、伊田も、第四般の車には、武士の

風上にも、おけぬ、司令部と見て、
冷遇方針、に

あることは、間違ひはない

ま、よ、行つて、さつと、碎けろ、と、腹を、はめろ

連修、様、に、屏東における。

そ、や、ま、に、屏東には、一度、行つて、みた、比島に

輸送する、形、も、様、も、作、成、に、加、加、する、形、も、部隊

の、屏東、の、一、歩、も、南、へ、お、様、と、は、し、ない、の、に

團、の、兵、と、六、子、の、に、何、と、六、子、事、に、と、腹、と

立ちあがり南へ一機も多く持ち残し隊
を送ることに努めた。

その攻撃の果は一般に司令部の退却である
到着してみると高田幹部 幕僚は既に持ち
場に到着して屯らじこめる。みんな見知り越し
の類である。

その類と見て全端「まわ」去るの要りな
方面軍、持ち師団の冷感方針はえれることには
大本をのらう。比島再帰還の指し電も想ひ
あせらるる。

去るに軍は一般に芝罘同僚をゆけねはならぬ
家と失った人は助けなければならぬ
宿舎をあてがい 自動車を分派した

通信の利用も取らうつに、おまうく 幕僚の
権限を越えたいあううし、このあて 師団長
共謀者の不慮を招く原因ともなつた。
第四師団軍の作戦を任るに待たぬと思ふこと
突撃しやもした 感謝してゐる人々も少くは
「あつた様だ」
この「處理」間に幕僚として、里要な仕事
を去るにつれ、逆りせぬ「まわ」の、
その「は」特攻隊の、隊訓を撤去的に調査する
ことあり 他「は」第四師団軍の退却の真相調査
にある。

此の次には沖絶の、作戦がある 在り、
練なり、持ち師団は、効果のある、方法は

に批判や議論の余地はあらうとも特攻以外に
手段がよい、特攻教令を至るまで作らねば
ならぬと思つた。

未だ操縦者におして 煤装被陸 後尾編隊
崇敬 降下攻撃法 陽動 通信 残存確認法
あつた。前内についで 運用者の立場からいへば
操縦者の立場から資料を収集し 調査整理
した。この後に 第八師団 理定、
特攻教令草案がある。数日後の沖泡
作戦にせうに 利用されたのは 離任の後に
知る由もないし 第八師団 師団の面々には
この世での口口のはないかとも思はれる。即ち
實際の沖泡作戦の問題、見受けられたる。

第四師団の撤退の真相はこの邊にはぬき
中將と 松が方良共、浮り舟に身をまかせた者は
ないからう。暗に 陰謀をもつてある 事柄丈に
一人でも自分の口からは語らなうし
假に 機密に 教員立場の真相らしきものと叙述
しても 要するは 故郷に子ねない、 謝罪代すの
謝り山であらう。
して見れば 甚な 過半になつた者が 断片的
事実を 綜合したから、真相に近づくと 断じても
大なる 誤りはないからう。
そのまゝ 事実を述べて見る。
第八軍司令部の北に到着し 方面軍司令部
に行くことよく 第八師団司令部に手こ

の第一声は「第四航空隊は第十方面軍に
既服土下……」であった。
屏東に行つた時、幕僚連は「航空部隊は
他の作戦区域から作戦行動することを得」と
いふ大陸示しに基き、兵力を恢復しつゝ、
岷島島に對し、行動する」と稱してゐた。
この軍司令官の撤退理由と幕僚の説明
とは根本的に違ふ何ものがある。
陸軍次官として内外に威をふるつてゐた宮内中將
は山下方面軍の指揮下に入ることを極力に
嫌ひ、山下中將のハチオの山中に司令部を
移し、この宮内司令官をいさしまりにハチオに拒致
するのに対し、かたとして受けつゞけ、クラークありあ

を死守するといふは、張つたミサキ、ゴング執で
四の宮の宮内にはおされゐた。
一宮心機一戦して航空軍司令官はエチルゲに
転進して司令部と機密部隊を先頭に
ミサキ宮内中將は第四方面軍に次の様子を
極めて思惑的なことを述べてゐる。
「航空部隊がこの様に兵力がなくなつて、如と
隊中に推移する場合、師団を以てして
その都分、航空軍司令官の命令を必要とするか、
師団を以てして、別に軍命令を必要とするか、
とせう」と云はば極めてあつて、答として
ある。

軍司令官の傍に居て退き日エナゲル場り場の
事案

先達は限り少将は其の通信所から馳せ
司令官の許に到り、閣下は其の戦局の
と大声に報告し、その電文には

第四師団は第十方面軍の指揮下にあり
……後不ぬ、敵は不ぬとあつたといふ
台湾に事このう、あはは誤訳であつたかも知れぬ
と言つてゐる。

凡数、時々の誤訳などあり様なく
誤訳は全部不ぬになるといふ時、平理を
無視したに似てゐる。

そして軍司令官のまちに於て、枝に於いて果つて

誰よりも早く、その傍に来たといふ事がある。

但し、その日記を見ると、高田共一は、

司令官より「日早く、その傍の南島の島に到り、
事このむに様に書つてゐる。」「日記も作り違ひといふ
こともあり、絶対とはいへない。

この頃の事案を綜合して、その事案は

高田共一(司令官共一)の創作以外、何ものもない。

極端な表現を以て、その四人合作の偽電劇
であり、世界史上稀に見る、愚痴の史実
あり、未曾有の喜劇であらう。

唯一人、誠に見上げ、その高田共一、高田共一

中佐である。戦後の戦後近エチアデーに残り残務
を処理し、戦に引上りの事だ。見事だ。な
と深く心に感ぜしに事があった。

之輩と同僚に本軍大の事はせぬはなすぬ。草山の
温床に身を横える。宿舎中隊と一方の兵隊に
毎日見事に行つた事。も。即ち。兵隊の不興
を。か。よ。一。因。た。つ。た。ら。し。い。

在らば。戦。の。部。隊。の。作。戦。思。想。や。兵。術。構。想。に
最初。軍。大。の。護。衛。の。あ。つ。た。
そ。の。は。し。な。く。も。戦。の。部。隊。兵。隊。の。現。は。れ
た。戦。の。部。隊。各。兵。隊。の。高。い。如。と。兵。隊。の。高。い。

著作。方面。の。深。さ。及。月。如。と。戦。の。主。任
矢。深。の。一。巻。に。集。ま。り。敵。の。予。想。の。伴。子
戦。の。部。隊。の。運。用。の。研。究。の。あ。る。
若。に。作。戦。方。針。の。問。題。の。あ。る。
台。湾。本。島。に。敵。軍。攻。撃。は。全。力。を。以。て。攻。撃。
中。途。戦。術。に。事。攻。撃。は。兵。力。を。温。存。し。て。一。戦。も
攻。撃。せ。ぬ。
と。い。ふ。の。あ。る。

戦。の。一。巻。に。集。ま。り。敵。軍。の。予。想。を。知。つ。て
戦。の。全。部。に。戦。の。構。想。を。知。つ。て。は。あ。る。の。か。
戦。の。部。隊。の。戦。術。は。戦。術。の。思。想。を。以。て。あ。る。の。か。
し。い。り。く。り。も。し。た。
方面。の。著作。は。言。も。あ。る。事。態。は。あ。る。

思はず立ち上つた。こんな事は「大事」である。
私は叱咤した。台場が敗れども國は敗れる。
沖籠の敗れたら日本は敗戦である。
「困る」共謀を「作戦」は「法面」してゐる。
休憩時に方面共謀の「作声」を「れ」として
る。

第二に「昇牛」方針の問題である。
敵軍攻せば一挙に立つて「全力」を「振つて」殺倒
撃滅する。と「六子」敵には「至り」ある。
「四」の「機」の「あつた」
「やう」とする「わけ」あつた。
私は「之」に「あつて」諍々として「説」つた。

地上勤務、地上整備の能力が物合する。
「一隊」に「効率」のある「攻法」と「なほ」なる。
「この」方法は「特攻」に「則ち」して
「運用」して「たい」と。
よく「二」の「機」を「把握」し「た」
「か」と「ある」もの「た」が「カリ」した「らう」
自身に「作声」した。

数日後「戦」の「命令」を「受けた」
第三「上」の「共謀」がある。
「さう」した「らう」が「それ」の「腹」が
「し」の「難」局に「い」く「らう」も「働」く「所」があるぞ。

沖絶は第三十三年編年の事なり。其の事、
志しるの事、切りにある。台湾より、
仕業の出来る事。
台湾赴任の世、快く、
心甲期する所ありと、
滞りく、
こゝに。

沖絶の巻

沖繩の風

昭和二十一年三月一日この日は沖繩へ赴任する日である。朝から米機動部隊の沖繩の東方海上に飛べして艦載機を放ち沖繩本島を中心にして爆撃を続行してゐる。

赴任のお準備は既に爆撃機の搭乗者達は走り出すことに首をかしげている。その通り危険な情状である。天候はよい。

飛り出ると申すは「お母さん」の言葉は君にやうな苦しみ仕事も「お母さん」といふやうし、共に謀るのうは「沖繩軍は航空部隊に協力精神を發揮して

一人である。

騒ぶ。相問に司令官に挨拶する。一言もな
入軍万はは仕声のさうしくとさ
申すや挨拶の場所の悪のつたのる。さうて
惚い。し。一。降も果にする。こ。は。青
将校として良心の許さる。私は軍人生活甲
所請面白の事や。一。目。に。会。つ。た。事。は。一。度。も
さうし。さ。れ。の。後。悔。し。こ。る。ま。い。軍。人。と。し。て
良心と執情さ。れ。一。平。の。結。構。に。
座に居る人ま。は。な。い。ソ。ン。ト。座。を。外。す。

座を外して暗い外にあると見知らぬ兵が待つてゐた。若手の兵は、

旅装は解いてな。し。未。に。宿。る。と。ころ。も。な。い。ま。よ。行。つ。て
やれ。此。地。は。辻。町。無。き。あ。と。辻。町。の。女。達
る。集。め。た。と。ある。一。軒。に。ある。民。家。を。借。り。と。げ
酒家としたところ。既に飲む程に放吟
してゐる。

酒間若手連中は、交々嘆き訴える。
曰く、「伏投通迫したう、さうぱり中央部の人は
見に来て居ません」
曰く、「作務主任者と、兵站主任者とは、意志が
疎通してゐません」

此の日は悪日であつた。一え命掛けの
赴任行があつた。さうして酒席に日と過し
連中。

嘆きに対しては内心同情する旨にはなるが、
つて、自分及び者及問して見たら、
自分自身はどうなるに
さう聞き返して見たら位のものである。

此の章で沖繩の教史を回想し様と云ふは
はよいの。沖繩の長が後を通じ長史以
外にんに甚る数件を記録してす
た。

若手連、嘆きの第一に就いて
十九年秋、沖繩共備強化的な大本營の
成る若し幕僚の沖繩に派遣された
現地側から成る強くなる増強を

要部より派遣幕僚は即答し終り東洋に帰つて
検討する旨答えた。途端、鉄拳の飛んだ
その様に考慮も思慮もなす。参考案のなる司令
部であった。

及面、この一月、比島から大本營の敏之作戦
主任、K中佐の用もなすのに、北投に一週間を
遊んでゐるに、このお返しに、北投の
その様にゲータウの學校の成績のよかつた
率によつて、要部の要職を占めるに
上も下も、少しポイントの外れに様だ。

若手連、第二の嘆きに就いて
この嘆きは、沖繩の兵備の開始から、沖繩の

北川 澗水少将は次の様に云ふ。

「我が場の土木作業は軍の任ずるところで

「ない。伊大等はよろしく土木作業に任

ずる機関を推進するべきだ」と。

「これに対し 我は飛空の主任者として 断平として

言つた。

「故郷城や砲台陣地は少中隊の砲台の

陣地であり 砲台は軍の砲台である。土木作業

については、我も少中隊の砲台の自らの兵衛的

見地や要求がなされる。飛空の基地は軍の陣

地である。軍の作戦の見地に基づいて自らの

造成するべきである。」 相違強し、謂ふこと言つた

こととを記憶する。

北川少将は「我は飛空の主任者である。飛空の主任者である。飛空の主任者である。」

校の兵衛教育として、我々の飛空の主任者である。飛空の主任者である。」

帰京後 作戦は長服部大佐に報告した。

「司令部の気力」と、兵衛思想に就いて

語つた。この要もよいので、直に披露した。

「我は飛空の主任者である。」

「困つた事だね。」

私は老將の本意と云つて、防衛総司令部に

半年程 防空作戦業務に就いた。

沖純軍は「防衛総司令部の指揮下に

属し、総司令部は「防衛総司令部の

指揮に属した。

夏の戦い日 沖谷軍より作兵軍はのるあり
横江八重子に事部

作兵軍の防衛司令部の会議の用がたに
八重子にはある 横江に「事」と「兵」に
及んぬるに

「徳の島八重子群島本島事部の
力に全部 沖谷本島に事部して

望むる防衛の陣地を構えし敵の攻至
に對して死守する。 と云ふのである。

この構想は或る條件をのぞけば見事なる
案にあらうに

或る條件とは 敵を基地の條件である。
今や第一次大戦時代の様に「事」と「兵」と

甚だなる時代にはあらうに

敵の武力の段に第三武力と称せられ 戦軍
武力としては第一位の地位に位するものに成るこ
ある。

米軍の本島を監視するにせぬ他の諸島
に敵を基地を任したるころなるものか

横江横江は近距離から 遠増頻度の様子を
る。たうし 駆逐機も撃つと陸軍も出る。

日本本土からの 横江返攻は不敵になる。
これには我は必ずに 敗戦を誘ふする様なる
ものがある。

その存する 考慮から 防衛司令部の作兵
事部は「断乎」として 及ぶに 八重子に

